HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代におけるツルの生息実態および人との関わり［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	久井, 貴世
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12068号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61687
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Atsuyo_Hisai_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：久井　貴世

学位論文題名

江戸時代におけるツルの生息実態および人との関わり

日本では現在、北海道東部地域に周年タンチョウが生息し、大陸から渡来するツルは主に西日本で越冬している。いずれのツルも個体数は増加傾向にあるものの、生息地が限られているため、一極集中化が問題となっている。この問題を解決するため、国や自治体、各種団体が連携して、集中するツルを各地に分散させるための取り組みが行われている。

ツルの生息地分散では、過去にツルが生息していた経緯をもつ地域を分散先として選定することが望ましいとされ、ツルの歴史的な生息実態を把握することが求められている。しかし、歴史的な情報については、ほとんど明らかになっていないのが現状である。

本論文は、ツルに関する歴史的な情報を収集し、現代の保護活動に資することを最終的な目標に据え、その基礎的研究として、これまで研究対象とされてこなかったツルの歴史的・文化的な観点から、江戸時代の日本におけるツルの分布と季節移動の解明、さらに当時のツルと人との関わりを明らかにすることを目的としている。

具体的な研究方法としては、始めに史料上に記載される「鶴」の名称が現代の生物の分類学上どの種に対応するのかを検討し、当時のツルの分類を把握した。その後、江戸時代におけるツルの分布を復元するため、翻刻史料のみならず全国の都道府県立図書館が所蔵する手稿史料を調査し、藩政史料のうち特に狩猟や贈答に関する記録、諸国産物帳・本草学・図譜・辞書・事典など江戸時代の動植物に関する史料、江戸時代の地誌や紀行、随筆、名所図会類、図像資料などの各種史料を用いて、ツルの分布の詳細や広域性、各地に渡来した種、ツルの渡来時期、季節移動の経路と渡りに関するツルの行動について、当時のツルの生息実態の復元を試みた。

本論文は序章、終章を加え、全 9 章からなる。

序章では、日本に生息するツルの現状と課題を整理し、現在行われているツルの生息地分散に関する活動を概観し、その上で本論文の目的と意義、研究方法と対象を述べた。さらに、先行研究の問題点として、次の点を指摘した。すなわち、①江戸時代のツルに関する情報について言及するものは多く確認できるが、これらは総じて断片的な内容に留まり、十分な研究が行われてきたとは言い難く、分布の詳細や地域ごとの生息実態などに言及するものはほとんどみられないこと、また②歴史的な記述を行う際の根拠として、著名な史料ばかりが用いられるため情報が単一化する傾向にあり、情報の検証を行わないまま引用され、概念的な情報だけが独り歩きしていること、さらに③江戸時代におけるツルと人との関わりについて言及するものがほとんど確認できなかったこと、の諸点である。

第 1 章では、本研究の最初の段階として、史料上に記載される「鶴」の名称が現代の分類学上どの種に対応するかを検討し、当時のツルの分類を把握することを試みた。ツルに関する 13 の名称を検討した結果、現代の分類学上の種との対応をおおよそ明らかにできた名称が多い一方で、史料による分類の混乱や揺らぎ、地域差などがみられることを確認した。史料に記載された名称を現在の種名に比定するためには、当時の複雑な様相に留意したうえで、史料の性質を確認し、十分な整理を行う必要があるとした。

第 2 章では、「鶴」という名称をめぐって混同されてきたといわれるツルとコウノトリについて、本当に混同されていたのかという問題意識から、誤認・混同の実態を明らかにした。江戸時代の史料において両種がどのように記述、認識されてきたのかを整理、検証し直した結果、ツルとコウノトリの名称の書き分け、形態や生態的な違い、利用方法の違いなどが明確に区別されていたことが確認できた。江戸時代にツルとコウノトリが混同されていたという単純な様子は確認できず、両種は別種として明確に区別されていたことが明らかになった。

第 3 章では、当時のツルの分布を復元することを目的とし、分布の詳細や広域性、各地に渡来した種について検討を行った。諸国産物帳を含めた地域産物誌史料、さらに幕府や諸藩の記録、地誌、紀行などの各種の史料を用いて、江戸時代におけるツルの分布の復元を試みた結果、ツルは沿岸の低地平野部や内陸の盆地などを主な生息地として、全国的に広く分布していたことが確認できた。また、渡来地と渡来数についての記述が確認できる同時期の史料が得られたことから、特に西日本を事例として、ツルの分布の広域性についても指摘した。当時の渡来地は複数個所に分散しており、それぞれの地域によって渡来する群れの規模も異なっていたことが明らかになった。

第 4 章では、日本に渡来したツルの生息実態として、史料上の記録をもとに、江戸時代におけるツルの渡来時期、季節移動の経路と渡りに関するツルの行動について検討を行った。その結果、江戸時代のツルによる季節移動の様式については、「北日本－東日本系統」と「朝鮮半島－西日本系統」というふたつの大きな系統に分類することができる可能性を示唆した。前者は、主に北海道から東北・北陸を経由し、関東あるいは中部地方まで至る渡りの系統である。後者は、現代の九州地方でもみられるように、主に朝鮮半島から対馬島や壱岐島を通り九州地方へ至る系統であるが、現代と異なるのは、移動の範囲が広く、九州だけでなく中国・四国・関西地方も範囲に含まれている点である。

第 5 章では、江戸時代に行われていた鷹場管理の一環としてのツルの「保護」と、それによって引き起こされた弊害について、いくつかの事例を挙げて検討した。江戸時代において、領主に独占されるツルは権威の象徴であり、ツルは当時の社会体制によって「保護」されてきたと指摘できる。江戸時代の主要な政治制度であった放鷹制度と、鳥類の贈答儀礼を維持するために行われた「保護」ではあるが、これが結果として、ツルの種の保全にも寄与していたと評価できる。ただし、野生のツルへの餌付けなどのため、人馴れしたツルによる農業被害が発生していたことが明らかにされた。

第 6 章では、江戸時代の武家社会におけるツルの捕獲と贈答について、当時定められていたツルの捕獲に関する諸制度や密猟の実態、ツルをめぐる贈答儀礼について検討を行った。ツルは領主によって特権的に独占されるものであったが、その捕獲は無条件に規制されるものではなく、藩によっては、猟師など百姓身分の者や藩士にツルを「捕獲する」権利を与えていたことを確認した。また、贈答品として利用されるツルそのものに注目し、これまで贈答品の「鶴」として一括りにされてきたツルは、種や状態、用途によって利用される場面や機能する価値が異なっていたことを明らかにした。

第 7 章では、飼い鳥、食用品など商品としてのツルについて検討した。江戸時代のツルについては、従来は「禁制の鳥」としての側面ばかりが注目されてきたため、ツルが

商品として売買されていた実態についてはほとんど検討されてこなかった。しかし、京都や大坂、江戸などでツルが販売されていたことを指摘し、さらに佐渡島では、猟師が捕獲したツルが奉行所を通して競り売りされていた実態を明らかにした。

終章では、本論文の結論として、江戸時代のツルは各地域に独立した個体群を有し、また複数の中継地の存在から渡りの際の経路も多様であったことを明らかにした。最後に今後の課題を述べた。